
BLUE in blue

ゆほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLUE in blue

【コード】

N9593N

【作者名】

ゆほ

【あらすじ】

高2を迎える春休み、大好きな恭輔が千晴の家に来てきた。用件はきつと千晴の姉、藍との結婚の承諾を父親からもらったためだ。落ち込む千晴の隣りで恭輔が言った言葉は……

現在「12歳の恋情」連載中です。

アイへと繋がるもの

激しく降る雨の中、少女は立っていた。

少女は人を惹く目鼻立ちの整った顔をしていた。

街へと出ればスカウトか何かには必ず声をかけられているくらい、その存在感は十分であった。

少女の視線は真っ直ぐと2mほど先に立つ、少女の父親らしき男と向けられていた。

アイツが言ったんだ。少女は昼間近くの書店でクラスメートの少年と会ったことを思い出した。

少女といい勝負の美しい顔の少年と少女はとても仲がいいとは言えなかったが、母親同士はそれとは逆に大変仲が良いので、少女の母親が「娘がまだ帰ってない」と言えば簡単に教えてしまうだろう。

彼と会ってしまったときからこうなることは少女は予感していた。

少女の前に立つ男は透明なビニールの傘を差し、穏やかな視線を少女に向けている。

男の傘の柄には少女のものと思われる赤い傘がかけられている。

「……藍……家へ帰ろう……」

アスファルトに打ち付ける雨音が男の声が少女の耳へ届くことを妨

げるが、少女の瞳は彼の言葉を読みとっていた。

少女は静かに首を横に振った。

「藍……」

傘を持たない方の手を少女に向けて差し出した。

少女の瞳から大粒の涙が溢れだした。

少女はその場から動こうとはしない。その意思を示すかのように両手はスカート裾を握りしめている。

「……っ……ったしは、だれのっ、こどもなのっ……」

嗚咽に混じって少女が問いかけた。

「おいで、うちに帰ろう。」

男は優しく言った。少女は男をもう一度見た。男がニッコリとほほ笑んだ。

少女は今度は男の元へ駆け寄って、縋りつき声を大にして泣き叫んだ……

満開に咲き誇った桜の花がひらひらと散り始めている。

始業式のための、この日小学校の門からは次々と帰宅する児童が出てきていた。

ランドセルを右肩のみに掛けた黄色い帽子の少女が校舎から走り出てきた。

あの雨の日の美しい少女だ。

あれから一年以上が過ぎている。少女はあの日より更に大人びた顔になったが、その表情は活き活きとし輝いていた。

彼女は前方に雨の日自分の居場所を両親に告げたであろう少年がいることを確認した。

今年もクラスメートになってしまった。けれど以前同様親しくはない。

あの日のことも直接話したことは一度もなかった。

少年の脇を通り過ぎたときに少女は後ろ振り返り少年を見据えて誇らしげな表情をした。

「私、お父さんと本当の親子になったんだよ。」

「そう……」

彼はいつも通り感情を表さないで答えた。

少女はそんな彼の態度なんかは気に留めることもなく走り去っていった。

空には綺麗な青空が広がっていた。

走りながら吸い込む空気を少女はとても美味しく感じた。

この日は少女にとって忘れがたい、喜びに満ちた日になった。

そして、少年にとっても……………

この日生まれた存在が少年にとってかけがえないものであることを彼はまだ知らない。

エクレア

「ん
」

春休みもあと僅かとなった日曜日の午後、千晴ちはるは姉の藍あいに言われた部屋の片づけをようやく終え両腕を伸ばした。

部屋は散らかっているというわけではなかったが、春休みに入るや否や藍が「いらぬものは処分して」と言い出しのだ。

学年も変わることもあったので、さすがに1年生の時の教科書まで処分することはしなかったが、中学時代のもので、もう不要なものを処分したりした。

一回り年上の藍は母亡き今は母親のような態度で千晴に接することが多い。

雑誌に載っているモデルなんかよりもずっと綺麗で華やかな藍。大学を出てスチュワーデスになったが、母が癌に冒されたときに仕事を辞め看病に専念した。

母が亡くなった後は旅行雑誌を出版する出版社に勤めている。

部屋を出て下のキッチンへ行くと藍がお湯沸かしたりとお茶の用意でもしているかのようだった。

！！！！

ふとダイニングテーブルの上の箱に気がついた。

「これ、『Gateaux J』のエクレアの箱じゃない!」

『Gateaux J』のエクレアは千晴の好物である。一般的なエクレアより細めに作つてあるが、中のカスタードが絶品なこと上にかかるチョコレートのフレーバーによって味が違うのだが、彩豊かで、その香りも良く。季節の素材を取り入れた限定版なんかもあり、巷でも大人気のスイーツだ。しかし1個が350円とお高いために千晴が自分で買うことはめったにない。

そのエクレアが箱で置いてあるのだ。

「えっ?なんで?どうしたの?」

「お父さんがさっき買ってきたのよ。」

お父さんが……意外だ。

「……誰か来るの?」

甘党ではない父が買ってくるというのであれば、来客があると予想される。

お茶の支度をしている藍はそれを知っているということになるから素直に聞いてみた。

「……恭輔……」

少しの沈黙の後に藍が答えた。

「恭ちゃん!」

千晴の心は嬉しくて一瞬跳び跳ねたが、次の瞬間しぼんでしまった。しかしそれを藍には悟られたくなく、言葉をつづけた。

「・・・最近忙しそうだったよね。元気かな？」

ついに、この日が来るんだ。

千晴の心は沈んだ。

佐伯恭輔は藍の小学校から高校までの同級生である。

顔立ちは藍と同様に素晴らしく整っているが、元気はつらつとした藍とは逆に寡黙で冷静な雰囲気を漂わせている、クールなタイプで、無表情でいることが多い。

恭輔の気持ちを読み取ることは難しかったが、それでも物心ついた時から千晴は恭輔が大好きだった。

母親同士が大変仲が良かったので、佐伯の家で談笑に耽る母達のそばで恭輔の帰宅を迎えることが幼い千晴にはよくあった。

恭輔の帰宅を知ると母が藍の帰宅に近いことを知り自宅に戻るといのがお決まりのパターンで、恭輔も好きだが藍も大好きな千晴にとっては輔の帰宅は嬉しいお知らせみたいなものだった。

しかし、12歳も年上の恭輔が千晴以外の女性を恋人にするのは当たり前のことだった。

学校から帰る途中などに恋人を連れだした恭輔を見るのを辛いと感じたのはいつの頃からだろう。

藍にも恋人がいたのだから、成人した者にとってそれは自然なこと

なんだと思う反面、自分はどつして12歳も年下で、恭輔に向
かっていく資格がもてないのだからと悲しく思っていた。

エクレア(後書き)

20100926一部改稿

お返し

ずっと恭輔を見ていたから、千晴はあるときから気づいてしまった。

恭ちゃんは藍ちゃんが好きなんだ。

だから、お母さんが入院中、藍ちゃんが看病に専念できるように、私の塾の迎えを恭ちゃんはやってくれてたんだ。

それに……

昨年6月に恭輔はマンションを購入し、独立した。

実家からの通勤が不便だからと言って恭輔は引越して行った。偶然千晴の高校と同じ路線だったので千晴は何度か寄らせてもらったことがあるが、どうみても一人暮らしには広すぎる間取りだった。

しかも新築だったので、内装関係は事前に色や柄が選べるものがあり、藍が良く千晴に「どれがいいかな？」と聞いてきたのである。

このときばかりは、もう二人が付き合っていることを認めざる負えなかった。

それまでは藍が別の男性を付き合っていたこともあったから恭輔の片想いかなと思っていたのだが、いつの間にかそうではなくなっていることにシヨックを受けた。

お茶の支度が整ったのか、藍がリビングのテーブルを拭き始めた。

ここで「藍さんと結婚させて下さい」とかいうのかな？

そんな場面を想像したら千晴は胸が苦しくなった。

ここには居たくない、そう思った時千晴は夕べ親友真樹からのメールで「映画にでも行くのか」と言われていたのを思い出した。

「ねえねえ、藍ちゃんこれからちよつと真樹とでかけてきてもいい？」

藍は驚いたような顔をして反対した。

「何言ってるのよ！千晴がいなくてどうするのよ！」

いや、いなくても支障ないんじゃないの？そう思ったが藍の迫力に声にすることは出来なかった。

「まったくもう、お父さんも戻ってこないし」

言われてみれば父の姿が見えない。エクレア買った後どこへ行っただんだ？

「お父さんどこへ行っただの？」

そう聞きかけたとき玄関の引き戸を開けるガラガラという音が聞こえた。

藍と二人で玄関に迎えに行くと、「そこでばったり会ったんだ。」

と千晴の父、誠治と恭輔の姿があった。

「もう、遅いじゃないの！」

手早く靴を脱ぎ玄関から上がってきた誠治に向って藍が言ったが、誠治の方は「心配かけたな」と呟くように言っただけで藍の頭をポンと軽く叩いて奥のリビングへと行った。

千晴は恭輔から目が離せなかった。

やはり千晴の想像していた通り今日の恭輔は休日に着用する普段着ではなくスーツの正装であった。

恭輔が改まった話しをするつもりであることは明らかである。

今日、藍と恭輔のことを聞いたら自分はどうなってしまうのだろうか？そんなことが頭の中を過りさらに胸が苦しくなった。

「千晴、これ」

中が上がったところで恭輔が小さな紙袋を千晴の目の前に差し出した。

「バレンタインのお礼。遅くなって悪かったな。」

「えっ、ああ、ありがとう・・・」

千晴がジュエリーショップのロゴの入ったそれを受け取ると、恭輔も誠治の後に続くように奥へ向かった。

恭輔を追う様に振り返ると藍と目が合った。

藍はどうしてか何か呆れたような表情をしてそれからキッチンへと向かった。

やっぱり、面白くないよね。モテモテでこれまでにプレゼントなんかたくさんもらっている藍ちゃんだって、自分の恋人が別の女の子にバレンタインのお返しにジュエリーあげるなんて。

いや、恭ちゃんがそんな恋人を不安にさせるようなことをするはずがない。これはきつと恭ちゃんママが持っていた袋をもらってきただけで中身は去年同様キャンディーか何かのはずだ。

後で藍ちゃんと一緒に開けよう。そうすれば藍ちゃんも安心するはずだ。

自分が失恋したことは辛い、けれど藍を不用意に悲しませるのも千晴は嫌だったのだ。

藍も恭輔も千晴は今も大好きなのだから。

リビング

恭輔からもらった紙袋を一旦部屋に置いて来た千晴はリビングの入り口で迷った。

誠治が二つあるうちの一人掛けの椅子に座っている。

その向かいの3人掛けの椅子に恭輔が座っている。

当然千晴は誠治の隣りの一人掛けの椅子に座ることになるのだろうが、藍より先に座っていてもいいのだろうか？
こういうときって何か作法があるのだろうか？

そくだ！こんな時は藍ではなく千晴の方がお茶の支度をして藍には先に座ってもらい最後にお茶を持って行けばいいのだと気がついた。

「藍ちゃん」私がやるよ。そう言いかけたとき、藍がそれを遮るように言った。

「千晴は座って待ってて」

????

仕方なく千晴リビングへ行き、誠治の隣りの椅子に腰かけた。恭輔が千晴を見ていたようで目が合ってしまった。恭輔にしては珍しく微笑んでくれたのだが、返ってそれが照れくさく。

「えへへ・・・」と笑ってごまかしてしまった。

「千晴、さっきの紙袋は？」

唐突に恭輔が聞いてきた。

「えっ、あっ、部屋に置いてきたけど」

「まだ見てないの？」

「・・・うん・・・」

「そう・・・」恭輔の表情が曇った。千晴の胸がズキンと痛んだ。

「は、早めに空けた方がいいのかな？もしかして冷蔵庫に入た方がいい？」

キヤンディーだと思っていたけど、溶けやすいチョコレートだったのかな？いや、そうならば「すぐに食べないなら冷蔵庫に入れておけ」と恭輔は絶対に言うだろう。千晴はどうしたらいいのか困ってしまった。

恭輔の方は「プツ」と吹き出して「いや、後で、でもいい」と、笑いを堪えるように片手で口を抑えながら言った。

誠治はそんな二人のやり取りを静かに見ていた。

「なんで千晴がそこに座っているのよ〜」

「え？」

コーヒーと紅茶のセットをお盆に載せて来た藍が、上から千晴にダメ出しをしてきた。

ではいったいどこに座ればいいのだ？

目を泳がせていると藍が「フン」と音を出しそうな勢いで顎を向かいのソファアームへ向けた。

こんなに綺麗なのに動作の一つ一つが美女らしくなくて、千晴は残念に思うこともある。でもそれが藍らしさなのだということも理解している。

きつと恭ちゃんも……

しかし、なんで私が恭ちゃんの隣り？お父さんも異論がないみたいだし。

仕方なく、でも恭輔の隣りなんて嬉しくて千晴は藍に支持された側へ移動した。すると、お茶をテーブルに並び終えた藍が先ほどまで千晴が座っていた席に着いてニコニコしている。

でもやっぱりこれ、おかしくない???

婚姻届（前書き）

改めて書きなおしました。

婚姻届

「お忙しいところすみません。」恭輔が誠治に向かって言った。

「いいや、千晴も無事高校に入学できたし、美里みさとの1周忌も無事に済んだし・・・それより恭輔くんの方がかなり忙しいと聞いていたけど」

誠治から「忙しい」と言われた恭輔の表情が一瞬歪んだ。それは忙しくなった原因を思い出しているように見えた。

「ええ、予想外のことが起きまして、それは今回の件とは無関係なので」

千晴はどうしていいのか分からずに二人のやり取りをキョロキョロと見ていた。すると藍が視界に入った。藍は「早く本題に入りなさい」とでも言いたげに恭輔を睨んでいた。

藍の視線に気がついたのか恭輔の方も藍を見た。けれども無反応のまま千晴の方へ顔を向けた。

感情を表に出すことの少ない恭輔が時折見せる千晴の好きな穏やかな表情だった。恭輔の瞳の奥には真剣な感情が秘められているようで、千晴はただただ見惚れていたが、これから恭輔が言おうとしていることを思うと胸が苦しくなり両手を膝の上で強く握りしめていた。

この場にはやはり居たくないという気持ちが溢れだし「あのう」と言いかけた時、恭輔の声が重なった。

「千晴さんとの結婚をお許し下さい。」

え？

恭ちゃん、今間違えた？

千晴が茫然としていると恭輔が千晴の方を見て言葉を続けた。

「千晴がまだ高校生という問題もありますが、僕としては彼女の願いを叶えてやりたいんです。」

私の願い???

自分に一体何が起きているのか。頭の中がグルグルと回っている。誰かに助言を求めたくて藍を見た。

藍は声には出さずに「良かったね」と口を動かしている。

次に誠治を見た。

誠治の表情は困ったねえとでも言いたげなもので、これは小さい時千晴がわがままを言うつと見せる表情だった。だがこの表情をしてい

る誠治が積極的に反対することはまずない。

千晴と目が合って誠治がほほ笑んだ。

ということは・・・

誠治は静かに頭を下げた。

「ふつつかな娘ですが宜しくお願いします。」

いいのか？いいのか？

「では早速入籍を済ませてきたいと思いますので、この書類の証人の欄に署名をお願いします。」恭輔がジャケットの内ポケットから書類を取り出した。婚姻届だ。

隣りから覗き込むと既に恭輔の署名と捺印、証人の欄には恭輔の父の署名がある。

藍がテーブルを片づけて場所を作った恭輔はそこに婚姻届を広げて置いた。

「千晴が先に書いた方がいいわよね。」

藍がボールペンを千晴に渡しながら言った。千晴は茫然としたまま受け取った。

「それから千晴未成年なので、同意書が必要になります。」

「あっそれならもうパソコンで作ってあるから後はお父さんの署名捺印だけよ。今持ってくるわ。」

そんなものまで既に用意されているのか？

ちらりと恭輔を見ると「なんでこっちに持ってきてなかったんだ。」
とでも言いたげに藍を睨みつけながら「2階に行くなら、さっき千
晴に渡した紙袋も一緒に持ってきて」と言った。

言われた藍の方は「なんで私がパシリにならなきゃ行けないの」と
言いたげに恭輔を一瞥してからリビングを出て行った。

千晴は婚姻届を改めて見た。

確かに恭ちゃんのお嫁さんになれるのは嬉しい。嬉しいけど、いい
の？ここにサインしちゃっていいの？

役所に提出したら本当に奥さんになっちゃうんだよ。

千晴はボールペンを持って固まったまま自問自答を繰り返していた。

「時間はあるから慌てなくていいから」

恭輔の声が聞こえた。「慌てなくていい」恭輔の言葉が声が千晴を
穏やかにさせる。

千晴は震える手で婚姻届に署名をした。

指輪

「あれ？恭ちゃん車で来てたの？」

今だ夢見心地の千晴。どういっわけか恭輔が今日中に書類を提出すると言っているの、書類が揃うや否や役所へ行くことになった。先ほど恭輔からもらった紙袋を藍から渡された千晴は家のそばの駐車場に連れて行かれ、そこに恭輔の車があるのに驚いた。

恭輔の実家は千晴の家から15分くらいのところにある。実家からうちになら歩きで充分だ。

「今日は実家には寄ってないんだ。それに役所に行くから車の方がいいだろう」

千晴の問いに恭輔が答えた。

役所は千晴達の住んでいるところからは少し距離があつて、時間をかけて運動がてら自転車で行くか、バスで行くのが通常である。バスだと役所まで迂回したルートで行くので意外と時間がかかる。自宅からバス停とは逆方向に駅がありそこと役所と駅を結ぶ役所が出しているシャトルバスがある。そのシャトルバスなら乗車時間が短くて済むが運航本数が少ないのでタイミングを逃すと返って時間がかかる。

役所には来訪者専用の駐車場があるので車で行くのが一番早いのは確かだ。

「ねえ恭ちゃん、恭ちゃんママと恭ちゃんパパは結婚のこと知ってるの？」

実家と聞いて千晴は恭輔に尋ねた。

「話してあるから心配するな。役所の帰りに寄って顔を出して行く。」助手席に座った千晴の頭に手を軽く乗せて恭輔が言った。

千晴は小さい時から恭輔の両親を「恭ちゃんパパ・恭ちゃんママ」と呼んでいる。恭輔は男ばかりの3人兄弟の次男だ。佐伯夫妻は女の子も欲しがっていたから藍も千晴も可愛がってもらっていた。恭輔の母、智代とちよの育児がひと段落した時に丁度可愛い盛りだった千晴は智代自身がずっと女の子を欲しがっていたので我が子同然のように可愛がられていた。その可愛い千晴が年齢的には早いとはいえ恭輔と結婚すると聞いて狂喜乱舞していると千晴は聞かされた。

千晴が通学に時間のかかる高校に進学したために佐伯夫妻に会ったのは12月の母の1周忌のときが最後で年が明けてからは会っていない。

その間に結婚すると報告していたのかな。

そんなことを考えたら少し恥ずかしくなってしまった。

千晴が恭輔の車に乗るのは初めてではない。中学3年生の時、塾が終わった千晴を恭輔はこの車で迎えに来てくれていたのだ。

「千晴、それ開けて」

「あつ、うん」

千晴は言われるがままに袋から中身を取り出した。キャンディーが何かだと思っていたが、中も同じジュエリーショップの包装紙で包まれている四角い立方体のものが出てきた。

一般的に考えれば中身は指輪か何かで

ちらりと恭輔を見たが恭輔は千晴が中身を出す作業を見守っている。千晴は包装紙を剥がした。包装紙の中は箱で、その箱の中にはビロード地のジュエリーケースが入っていた。そのケースを開けるとダイヤの指輪が入っていた。

「あ」

千晴は改めてこの状況の説明を恭輔に求めようとしたが恭輔は黙ったまま指輪を千晴の左手の薬指に填めてしまった。

驚くことにサイズはピッタリだった。千晴が指輪に目を奪われていると車は発進した。

恭輔が何も言わないことに千晴の疑念は晴れなかった。

やっぱりこれって冗談かも。指輪まで用意してかなり性質は悪いが、恭ちゃんパパと恭ちゃんママにご挨拶もしないで入籍なんてありえないよ。多分藍ちゃんのいたずらにお父さんも恭ちゃんも使われているんだ。

まったくもう藍ちゃんは。後で藍ちゃんはしっかり怒らないと。

夢見心地の気分は半減し、幾分冷静になったところで千晴はこれは藍が仕掛けた冗談だと思っていた。

役所

が、

「おめでと〜ございます。」

役所で婚姻届が受理されてしまった。

千晴は今この時点で「佐伯千晴さえき ちはる」となってしまうた。

いいのか？

恭輔に聞きたいことがたくさんあるのに、その隙を与えてもらえていない気がした。

書類を提出する時でさえ必要最低限のことしか発言しない。そんな恭輔は普段と変わりないが、やっていることは日常からかなりかけ離れたことなのだ。

千晴は恭輔から事情を説明して欲しくて仕方がなかったのに、足早に進む恭輔の背中を追いかけるのが精いっぱいだった。

役所の建物を出て駐車場の車を目の前にしたところで、千晴は突然思い出した。

恭ちゃんは藍ちゃんが好きなんじゃない？

まさか！？

藍ちゃんに頼まれたから私と結婚した？

この入籍がいたずらだとしたら首謀者は藍しか考えられない。千晴は自分の考えに寒気を覚えて震えだした。そして恭輔の車の前で立ち止まったまま、自分で自分を抱きしめるような仕草をした。

「千晴？」

千晴の異変にすぐに気がついた恭輔が千晴の方にかがみこんで問いかけた。

「恭ちゃん……」

体中から血の気が引いて行くのがはつきりと分かった。恐らく顔も青ざめているに違いない。怖くて真実が聞けない千晴は縋るような眼差しを恭輔に向けた。

恭輔は静かに千晴を抱きしめた。

「大丈夫だから、何も心配することはないから」

恭輔の抱きしめが強くなった。恭輔の胸に頭を押し付けたようになっていている千晴の頬に恭輔の鼓動が響いた。

千晴の震えが止まると、恭輔は千晴から体を離した。

そして千晴の頬に両手を添えて、しゃがみ込むような姿勢で千晴の真正面に顔を向けた。

「絶対、幸せにするから」恭輔は千晴に顔を近づけた。

キスされる！

千晴は両腕がつかえ棒になるように恭輔の胸を手の平で押した。

「ダメー！恭ちゃんダメー！！」

千晴目から涙がポロポロとこぼれ出した。恭輔が指で涙を掬った。

「千晴？」

「恭ちゃん、こんなことしちゃダメだよ。藍ちゃんに頼まれたこと聞いているだけじゃ、ダメだよ。」

「藍？」恭輔の表情が曇った。

「ちゃんと好きって伝えたら藍ちゃんだって応えてくれるかもしれないし」

「千晴、何を？」

さらに険しい表情になった恭輔を見ていたら、その場にいられなくなった千晴は恭輔の前から走り出した。視界の隅に駅に出るシャトルバスが見えたので急いで飛び乗った。これまでにないくらい急いで走ったので酸欠状態になり座席に座ったところでしばらくは肩で息をしていいいた。

呼吸が落ち着いたところで窓の外を見た。恭輔がどうしたか気になったが、千晴にはどうすることもできない。

あっ、婚姻届の取り消しってできるのかなあ。やっぱり「離婚」になるのかなあ。たった1日でバス1つてどうなんだろう。これも返さないと。さすがに藍ちゃんにこれは渡すことはないだろうけど。

千晴の薬指でキラキラ光るダイヤモンドを千晴はじっと見ていた。

シャトルバスが駅に着き降りたところで千晴は立ち止った。

父が、誠治がそこに立っていたのだ。

プロポーズ

「恭輔くんから電話があつて、千晴がシャトルバスに乗ったから駅で捕まえて欲しいって、父さんと入れ違いに家に着いたみたいだよ。藍がさつき電話をくれた。」

「そっか・・・」

「どうしたの？喧嘩でもした？」

「喧嘩なんかしてないよ。ただ、藍ちゃんに好きって言ってって」

「千晴？」

「なに？おかしい？っていうか届け出しちゃった後に言ったんだよね。どうしよう。離婚届け出したら恭ちゃん、藍ちゃんと結婚できるの？」

誠治は今度は本当に困った顔をしている。実際に困っているのだろう。1時間ほど前までは恭輔と千晴が結婚する話で、今は恭輔と藍の結婚の話になっているのだから。

「とにかく一度父さんと一緒に家に帰ろう。」誠治は千晴の手を取って言った。

「でも・・・」

家には恭輔がいる。気まずい。千晴は体を強張らせて家に戻るのを拒んだ。

「千晴達は何か話し合いが足りないんじゃないかな」

そうだ、話したいこと聞きたいことはたくさんあるのに。でも、恭輔や藍から語られる真実が千晴にとって辛いものだったらと思うと、問いただす勇気が湧いてこないのだ。

「千晴、父さんじゃ千晴の力にはなれないかな？」

千晴は黙ったまま俯いて、涙を流した。父は、誠治はこんなにも温かで、途方に暮れた千晴が進むべき道を自分で見つけられるように助けようとしてくれている。

前に進まなくてはいけない。

聞かなくてはいけないこと、知らなくてはならないことそこから目をそむけてはいけない。

千晴は静かにそう思った。と、同時に誠治が千晴の手を取り家へと向かった。

玄関の戸の前に立つと横で手を繋いでいてくれた誠治がガラガラと戸を引いた。

視界を遮っていた戸がなくなると音に気がついた恭輔が千晴の方へ振り向いた。と、同時に千晴の手首を掴み自分の方へと引き寄せそ

のまま抱きしめた。

「千晴、俺と結婚してくれ」

静かな低い声が聴こえた。

恭輔の言葉に千晴の胸は高鳴った。

プロポーズされちゃった。

でもなんか順番おかしくない？

千晴が頭を捻っていると、藍が恭輔に向かって叫んでいる。

「ちょっと恭輔何言ってるの！千晴のこと泣かしておいてずうずうしいわよ。」

さっきとは打って変わって怒り狂っているといった様子だ。どうやら役所で千晴が泣きだしたことを恭輔から聞いたらしい。

「藍止めなさい。」誠治が静かに藍を制した。

「だってお父さん」

「まず、千晴と恭輔くんにちゃんと話し合ってもらった方がいいんじゃないかと思うんだ。もちろん、千晴はまだ未成年だから立ち合わせてもらうけどね。藍、もう一度何か飲み物を用意してくれないか。」

「……はい……」

納得のいかない様子の藍はキッチンに入って行った。

「恭輔くんと千晴も中に上がって」

恭輔に抱きしめられたままの千晴は誠治に見られてしまったことに顔を真っ赤にしていたが、恭輔は気にする様子もなく「分かりました」と頷き靴を脱ぎ始めた。

つられて千晴も靴を脱いで中に上がったが恭輔が腰に手をまわしていたので、二人は寄り添った状態だった。

先ほど座ったソファーにも密着した状態で座らされた。

背中に恭輔の手がある。恭輔は上体を少し捻って千晴の方を覗き込むようにしている。

恭輔を見るとその向こうに誠治がいるので、この密着した状態が恥ずかしい千晴は俯いてしまった。

けれども先ほど誠治に言われた通り、話し合わなくてはいけないと思ひ、意を決して恭輔を見た。

「恭ちゃん、私と結婚しても、いいの？」

「もちろん」

一言一言呑み込むように聞いた千晴に対して、恭輔はあっさりと即答した。

「・・・藍ちゃんのことを、好きなんじゃないの？」

「その考えは脳内から抹消してくれ！」

目をつむり肩を落としながら恭輔が言った。そこまで否定しなくても思っただが、千晴の心が少し軽くなったのも事実だ。

「ちょっとくつつき過ぎじゃない。」

コーヒーと先ほど食べ損ねたエクレアを乗せたトレイを持った藍が言った。

「気のせいだろ」藍を見ることなく完全否定をした恭輔に藍が睨んだ。

「恭ちゃん、でも藍ちゃんがマンション内装のこととか決めてなかった？それって付き合ってるからじゃ」

「違うでしょ！あれは恭輔が千晴はどれが好きかって言うから千晴に聞いて恭輔に伝えただけよ。」

え、そうなの？

「じゃあなんで、その・・・結婚しようとかって先に言ってくれなかったの？」後ろの方は小声になりながら千晴は聞いた。

そもそも、先にプロポーズしてそれから入籍とか結婚式とかじゃないのか？

しかし、千晴の疑問は藍の発言によって一刀両断された。

「はあ、千晴が『16歳になったらすぐ恭輔と結婚したい』って言ったから恭輔も私も16歳の内に結婚できるように動いてたんじゃないの」

えっ？藍ちゃん、今、なんておっしゃいましたか？

わがまま

「千晴は覚えていないのか？」

これまで黙っていた誠治に問われて千晴は黙ったまま頷いた。

覚えていないとうか、知らないとうか、初めて聞きました。

「いつ、言ったのかな？」

恐る恐る尋ねてみた。

「思い出せないならそれでいいじゃない。他の人から与えられた情報で記憶にするようなことじゃないでしょ。」

「恭ちやあん。」

藍のけんもほろろな一言を聞いて千晴は次に恭輔に縋ったが、恭輔も藍と同意見のようであり合ってはくれなかった。

千晴は一体いつどんな風に恭輔にプロポーズなんて大それたことをしたのか疑問でどうしも知りたかった。

「これでこの結婚は無効ね。」

えっ！なんで？

千晴は藍を見た。

「だって千晴覚えてないんだから。」

だから教えてくれと言ったのにと抗議の視線を千晴は藍へ送った。

「俺がさっき結婚を申し込んでいるから問題ない。」

「それじゃあ順番がおかしいでしょっ！」

恭輔の発言に火がついたように怒りを顕わにした藍。それはまるでへびとカエルの睨み合い、もしくは犬と猿のケンカ、千晴はそんなことを思った。

「千晴はどうしたい？」

「えっ!？」

「藍の言う『順番』のことはとりあえず抜きにして、恭輔くんに結婚を申し込まれて千晴は何て答えたい？」

誠治が優しい穏やかな眼差しで千晴を見つめている。

「どんな答えでもいいんだよ。」

千晴は父さんと母さんと藍の我がままで生まされたようなものだから・・・」

それは違うと言いたくて千晴は激しく首を横に振った。

「だからね、千晴が幸せになれる、そんなわがままだったら父さん達はきいてあげたい、って思っているんだよ。だからどんな答えでもいいんだよ。」

誠治はニツコリとほほ笑んだ。

藍は「うん」力強く頷いてくれた。

二人の表情は「どんなときも味方だよ。」って言うてくれていると

分かった。

それから千晴は隣りに座っている恭輔を見た。

恭輔は千晴の手を取り優しく握ってくれていた。

「どうしたい？」

恭輔が静かに聞いてきた。

「……恭ちゃん、私のこと好き？」

「好きだよ。」

「本当に？」

「俺が今まで嘘言ったことあるか？」

「……ない。」

恭輔は千晴に嘘をついたことがない。

いつも真実しか語らない。

千晴は小さい時から恭輔から本当のことだけを教えられてきた。

地球が丸いこと。

光によって影が出来ること。

8時30分は9時より先にやってくること。

だから恭輔が「千晴が好きだ。」と言えばそれは本当のことなのだ。

お父さん、本当にどんな答えでもいいの？

声には出さずにそう思いながら千晴は誠治を見た。

誠治が静かに頷いた。

千晴はこの日一生分のわがままを使い切ったと思った。

引越し

「恭ちゃんのお嫁さんになりたい」

物心ついた時には千晴はいつもそう思っていた。それでもそれは叶わぬ願いだと悟っていたが、

今、あっけなく叶ってしまった。

しかも記憶のないところで自分から恭輔にプロポーズしていたらしい。

これでもう宝くじとか買っても当たらなそう。商店街の福引もきつとティッシュだろうなあ。

「藍、これでいいかね。」

誠治が藍を諭すように言った。

「分かっているわよ。千晴、改めておめでとう。恭輔、今度泣かしたら本気で承知しないからね。」

誠治には不貞腐れて答え、千晴には柔らかく微笑み、恭輔には凄みを利かせて藍は言葉を発した。

「さっきのは千晴のありえない勘違いが原因だろ。」

言い負かされる気はないという恭輔の態度を見て、千晴は長年に渡って恭輔と藍が一組の仲睦まじいカップルだと思っていたが実はそれは大きな勘違いだと痛感した。

ずっとケンカするほど仲がいいって思ってきたけど、藍ちゃんと恭ちゃんて本当に仲悪い？っていうか気が合わない？

そしてこれからのことを考えてみた。

「あのさあ、私やっぱり恭ちゃんと一緒に住んじゃったりしていいの？」

「いいわよ。そうだ恭輔、引越しはどうなったの？」

「来週の土曜日、時間は一応午前中つてことになっているけど、金曜の午後に業者から電話来るから詳しい時刻はその時。」

「やだあ、千晴の学校始まつてるじゃない。」

「あ　　っ！学校！！！！どうしよう。学校に何て言おう。」

結婚したと正直に話してもいいもだろうか・・・
法律的には許されても校則ではどうなんだろう。やっぱり退学？

千晴の胸の中は不安でいっぱいになった。

「大丈夫。許可取つてあるから。」

「へ？」

「何よ。」

「いつ、いつ？」

「期末試験の終わり頃、お父さんと学校に事情説明しに行つて」

「先生、何も言わなかったけど・・・」

「担任が本人より先に知ってるってどうなの？」

「うん、一応内密にすることになったから、千晴を職員室とか校長室に出入りさせたらマズイって判断したんじゃない？」

「はあ」

「あつ学校では旧姓の『三浦』のままだからね。保護者の連絡先もこつちのままになるから」

「なんで、許してくれたんだろう・・・」

素直な疑問だった。

「前例があつたから」

！！

「5年くらい前に丁度在学中に結婚しなきゃならない生徒がいて、あつ妊娠とかじゃなかったけど、だからうちも内密にするから・・・うっ、許して下さいって」

何故か藍は泣き真似をしながら言った。

確かに藍のような美人が泣きながらお願いしたらなんでも許されそうだと千晴は思った。

「・・・そんなことじゃなくて、引っ越するまでこっちでいいのね？」

いきなり泣き真似を止めた藍が恭輔に念押しする。

「ダメだ。学校に必要なものは今日中に車で運ぶ。他に必要なものは後で買いに行くからいい。」

えっ、もしかして今すぐ引っ越しですか？

「・・・千晴はそれでいい？」

「えっ？あつ、はいっ！」

「嫌なら嫌って言うてもいいのよ。なんなら籍だけ入れて置いて卒業まで家にいても」

千晴にしなだれかかるように妖艶な笑みを浮かべて藍が言う。

「藍！」

誠治が悪ノリし始めた藍を止めた。

「お父さんももっと娘がお嫁に行つて寂しーって出さないよ。」

「ははっ、そうだね。寂しいね。でももう2度と会えないわけじゃないし、それにそんなことを言つたら千晴が悲しむじゃないか。」

「・・・分かった。千晴、学校に必要なものを今すぐに用意して！」

えっ!?

「でないと恭輔と一緒に住めないわよ
藍がニッコリほほ笑んで言った。」

荷造り

制服、鞆、辞書、それから・・・と

千晴は昼間片付けていた自分の部屋で恭輔のマンションへ急ぎ持つて行くものを広げていた。

進級するのだから1年生の時の教科書は今日じゃなくてもいい。

あと急ぐものと言えば着替え、と思ったところではたと気づく。

タンスの中身全部を今日というわけにはいかないから・・・

さて、どうしよう。

「あつちに洗濯機だってあるんだから2〜3日分の着替えとパジャマくらいでいいでしょ。」

部屋の入り口で千晴の心の声を聞いた藍が答えてくれた。

さすが藍ちゃん。

そうだそうしよう。

千晴はお気に入りで組み合わせが何通りかに出来そうなトップとボトムをメインに靴下などの小物をあわせて選んだ。

「金曜日は学校が終わったらかこつちに帰って来なさい。引越しは業者が荷づくりもしてくれるみたいだから持って行かないものだけ片付けねばいいでしょ。」

朗々と話す藍の姿に「なんだか段取り良過ぎだよ。」とちよつと不満の声をあげた。

「だいたいなんでうちの学校に秘密に結婚してた人がいるって知ってたの？」

「ん、企業秘密……」
いつの間にか千晴の隣りに座っていた藍が人差し指を唇に当ててほほ笑んだ。

この笑顔に何人の男の人が惱殺されたんだろう。
でも恭ちゃんは惱殺されなかったんだ。

ん、藍ちゃんて恭ちゃんにこういう表情みせたことあるのかな？

確かに千晴が今通っている秀明館高校は藍が見つけてきた。

千晴は本当は藍と恭輔の母校清陵高校に行きたかったのだが、千晴の成績では夢のまた夢だった。

美里が清陵高校まで続く桜並木がお気に入り、秀明館は長い坂を登った高台にあるがその坂道に桜並木があり、それを美里に入学式で見せたいと千晴頑張っていた。

「秀明館を知った時にね。もし受かればやっぱり千晴は高校生のうちに恭輔と結婚出来る運命なのかな」とか考えてた。で、落ちたらなしだなんて。」

う、受かってて良かったー。

藍を見ると天井を見ているわけでもないが上を向いて何か考えているような表情をしていた。

「藍ちゃん……」

「帰ってきて、いいんだよ。」

藍は決意を表すように言い切った。

「ここは千晴の家だから、恭輔とケンカして行くと来ないから、とかじゃなくて近くに来たからとかそういうんじゃないで、ただ会いたくなっただとか、そんなんで、」

藍が泣いてしまう。千晴の胸が苦しくなった。

「帰ってきていいんだよ。」

「うん」

携帯

「あつ、そうだ。結婚式は卒業してからだから」

学校に必要なものと着替えをいくつかまとめて恭輔の車に乗せ三浦家を出発した千晴と恭輔は、恭輔の実家、佐伯家で簡単な挨拶をした後新居となる恭輔のマンションへ向かった。

佐伯家を出発してからしばらくして運転中の恭輔が思い出しかのようについに告げた。

しかし、言われた瞬間、千晴はすぐに内容を理解できなかった。

「へっ？えっ？あつ！ああ結婚式、ね。」

そうじゃん。普通は結婚式とかするんだよね。

「学校に卒業まで内密にするって約束してるからな。親戚とか呼んでそこから漏れてもマズイし、かといって誰も呼ばないってのも、無理だろ。」

「そ、そだね。」

「それに結婚式の準備を藍にこっそりやらせるわけにも行かなかつたからな。」

「う、うん。そうだね。」

あれ？今「こっそり」って恭ちゃん言いました？

千晴が覚えていないことに加えて恭輔達が意図的に千晴に気づかれないように行動していたのではないかと千晴は感づいた。

「お邪魔します。」

「もう『ただいま』だろ。」

玄関で靴を脱ぎながらお客様の挨拶をした千晴に恭輔が指摘した。

「そっか。」

今日からここに住むんだよね。

千晴は先に中へと進んだ恭輔の背中を見ながら小さな声で「ただいま」と言った。

千晴の荷物を持った恭輔は寝室へと入った。

千晴はその後を追った。

「半分空いているから好きなように使って。」

作りつけのクローゼットの中には引き出しタイプのケースが入っていた。

千晴は寝室に鎮座しているダブルサイズのベッドに目が釘付けになっていた。

も、もしかして今夜からここに一緒に寝る、とか？

「結婚」ということが何やら急に現実味を帯びてきて千晴の全身が一気に硬直した。

「千晴？」

「うわあ！！はいつ！？」

ベッドに腰掛けた恭輔が覗き込むように声をかけてきたが千晴は戸惑いを隠せなかった。

「ふ、ふ、ふ、ふくっ服っしま、しまっちゃうっ、ねっ」

衣類を入れてきたバッグを持つと体の向きを変えようとした時恭輔が千晴の腕を掴んでそれを拒んだ。

「恭ちゃん……？」

千晴の腕が恭輔の元へゆつくりと引き寄せられると千晴の体は自然と恭輔の目の前に寄せられた。

恭輔は千晴の両手を握って己の前に立たせた。じつと千晴を見つめる恭輔の瞳から千晴は目が離せなくなった。

千晴の心臓の鼓動は昼間シャトルバスに乗り込むために走ったときよりも激しい音がしていた。

恭輔が立ち上がり千晴を抱きしめようとしたとき

ピロロロロ、ピロロロロ・・・

恭輔の携帯が鳴った。

恭輔は片手で千晴を抱き込みながらもう片方で携帯をポケットから取り出し通話ボタンを押した。

「はい、佐伯　こっちにかげんなよ。」
だ、誰からかな？

見慣れた恭輔の携帯を見つめながら、明らかに機嫌の悪い恭輔の声に千晴は電話の相手が気になった。

恭輔は千晴を抱えた腕を離さず、再びベッドに座ったので、千晴は体を半回転させて恭輔の上に座るような状態になってしまった。

背中から抱えられていた腕が今は千晴のお腹にある。

ひ、ひえ～～～っ。

「　　持って行くわけないだろ。」

千晴には理解不可能な会話が続く。

「白戸しほは退院できたのか？」

誰か病気なのかな？

「退院」という言葉に千晴は不安を覚え恭輔を見た。

千晴の反応に気がついた恭輔は千晴を抱えていた方の手で千晴の髪を掬った。

「分かった。明日早めに出る」
「そう言い終えると恭輔は通話を切った。」

「荷物しまつて、メシ食いに行くか。」

「うん、あつ冷蔵庫に何かあるなら作るよ。」

「この半年、ほとんど帰って寝るだけだったから冷蔵庫には酒しかない。」

えっ？

「朝ごはんは？明日はどうするの？」

「メシ食った後でスーパーに寄るか。」

「うん。じゃあ服片付けちゃうね。」

千晴は急いで立ち上がって持ってきた制服や着替えを片付け始めた。それを眺めながら恭輔がため息のような息をフーッと吐いた。

恭輔の気配に気づいた千晴は振り返って恭輔を見た。

穏やかな微笑を湛えて恭輔が千晴を見ていた。

試験対策

恭輔のマンションは最寄駅の改札を出て5分と歩かない所にある。周辺は住宅地、環境は良好。

駅を挟んだ反対側は商店街で夜遅くまで営業している大手スーパーや専門店が並んでいる。

ファミレスやちよつとおしゃれなカフェもあるので、引っ越してからの半年間、恭輔はこの商店街の夕食や弁当、惣菜に相当お世話になっていたようだ。

「もう少し気の効いた所に連れて行きたかったけど、色々あったからな。」

それは千晴が役所で逃げ出したことを指している。自分の勘違いが元とはいえ千晴にも言い分はある。

「だってやっぱり事前に知らされてなかったし・・・でもこのパスタも美味しいよ。」

千晴と恭輔は商店街の中にあるイタリアンのお店に来ていた。

同じ商店街の中にある青果店が店主の実家らしく、食事のセットには生ジュースがついていて、千晴は自家製の生めんとそのジュースがとても気に入った。

「千晴は顔に出るからな。結婚話しに現抜かして成績落ちたら学校の許可だつて取りにくいし。」

「うっ・・・あつもしかして試験前の藍ちゃんのカテキヨが厳しかったのも」

「まあそついうことだな。」

昔から千晴の勉強は藍や恭輔、それに恭輔の弟の玲が手の空いている時に見ていた。

千晴が中学生になってからは定期試験の頃に集中的に見てもらって

いたが、入試前より高校に入学してからの方が藍の指導が厳しくなっていたことが、千晴はずっと気になっていた。

そのおかげで千晴の成績は今のところ中の上といったところだった。確かに学業優秀な藍と恭輔と比べれば千晴の学力はお世辞にも優秀とは言いがたい。

そういう意味では藍の厳しい指導を含め藍と恭輔が千晴に気づかれないように準備していてくれたことはそれなりに効果があったというわけだ。

あつ、でもこれからは自分で勉強しなきゃだめなんだ。

うわ〜どうしよう・・・

千晴が思っていたことが恭輔には分かったようで

「これからは俺が見るからな。俺が忙しい時は玲か藍を家に寄こすつもりだけど。今までみたいに試験直前手のは止めて、時間のある時に少しずつやっておけばなんとかなるだろう。」

な〜んだか。新婚さんの会話じゃないよな〜

甘くない内容の会話にがっくりと肩を落とす千晴。

ああせめて私がプロポーズしたことでも思いたせれば。

今後の勉強のことよりもその一点だけが千晴は悔まれてならなかった。

習慣（前書き）

短いです。

習慣

「恭ちゃん、朝はパン？それともごはん？」

夕食を済ませた帰りに立ち寄ったスーパーで千晴は恭輔に聞いた。

「朝は無理に支度しなくてもいいぞ。」

「なんでー？それにさっき電話で明日は早く出かけるって言ったけど何時頃出るの？それと帰りは？」

「7時半には出掛ける。帰りは・・・早くはないだろうな。5時過ぎに1回連絡するから。夕飯の支度も特には必要ない。」

恭輔と結婚したという現実にとまどいはあるものの母が亡くなって高校受験が終わり藍が再就職してからは三浦家の家事のほとんどをこなしていた千晴が翌日の食事の事を考えてしまうのは習慣であった。

「・・・余計なことだった？しない方がいい？」

「いや、そんなことじゃないから。千晴がやりやすいようにすればいい。」

カートを押す千晴の頭をくしゃっと捕まえて恭輔が言った。

千晴は恭輔を見つめていた。

それは今の恭輔の言葉が自分を突き放すものなのかどうか恭輔の心に問いかけているような表情だった。

「千晴と俺は結婚したんだから。」

恭輔が千晴の無言の問いに答えた。

「パンにしようか。恭ちゃんよくコーヒー飲むから、それに卵と生野菜買っておけば目玉焼きとサラダとかでおかずもつけられるし。」

「任せる。」

「夕飯は・・・明日またこの商店街に来てみるよ。温め直して食べられるもの用意しておくね。明日食べられなければ明後日でもいいような感じで。」

うんうんと自分自身で確認するように千晴が語る。
それを恭輔は穏やかに見守っていた。

青空

『オフロガワキマシタ』

機械的な女性の声が響いた。

先ほどスーパーで買いもした食材を冷蔵庫に片付けていた千晴はリビングにいる恭輔を見た。

一度も見たことのない白い携帯で話しこんでいる恭輔は視線に気がつくと先に入るようにという意図で千晴を指差した後に風呂場を指差した。

着替えのパジャマを持って脱衣所に行く。

洗面台のそばの棚に白いバスタオルが2枚綺麗に畳んでしまっていた。

1枚を着替えの上に乗せて千晴は入浴した。

恭輔の実家、佐伯家には小学校の低学年頃まで時々預けられることがあった。

佐伯家で夕飯を食べ風呂に入り、恭輔のベッドで寝る。

夜遅く両親が迎えに来て朝は自宅で目覚めるというパターンだった。預けられた理由はその時々によって違っていたが、母美里が同窓会に出掛ける場合など、母の用事であることが多かった気がする。

でも、今夜からは違う。

まず第一にもう誰も寝入った千晴を三浦家には運ばない。

千晴自身も後数時間で17歳で幼児ではない。

そう、佐伯恭輔の妻なのだ。

「やっぱ、あそこで寝るんだよね。」

今夜恭輔が自分に触れるかもしれない。
そう考えると湯船のお湯まで沸騰させてしまうのではないかと思う
くらい熱くなった。

風呂からでた千晴はリビングの扉を横切ると扉が開いたままだったのでまだ電話で話している恭輔を見ることができた。

仕事の話のようで千晴には内容がさっぱり理解できなかった。

会話の切れ目で恭輔は千晴を見た。

髪が濡れ、パジャマを着ていることから入浴が済んでいることが理解されたようで

「寝室、暖房ついてるから」

通話口を押さえて恭輔が声をかけた。

千晴は黙ったまま頷いて寝室へと向かった。

ドアを開けると程よい暖かさの空気が千晴の頬に触れた。

微弱ながらも恭輔が暖房をつけて置いてくれたことが分かり、千晴の顔は綻んだ。

部屋の明かりをつけ中に入るが、千晴はどうしていいのか分からず背中でドアを閉め己の体重をそのドアにかけたまま立っていることしか出来ずにいた。

室内を見渡せば、先ほどと同様にベッドの存在感に圧倒される。

そのまま視線をクローゼットとは逆の壁面書棚に移した。

まだ空いているスペースの方が多い書棚の一番下、背の高い本を置く予定なのか高さを充分に取っているそこに一冊だけ表紙が上に平置きされている大きな本が目が止まった。

千晴は書棚の前に行きその本を取り出した。

本の表紙は、実際に本物を見たら目が眩むのではないかと思うほど

の眩しい青空の写真。

静かにページを捲れば、表紙の写真にも負けなくらいの美しい青空ばかりが目に入る。

一緒に写されている町並み、草原、海、世界的に有名な建造物も青空を美しくさせるための飾りにしか過ぎない、そんな写真ばかりだった。

千晴はこの写真集を以前にも見たことがあった。

その場所は母の病室。

藍が外出できない母のために気分転換になればと買ってきたものだった。

「どうして……」

恭輔も偶然同じ本を持っていただけなのだろうか？

藍が恭輔にも買ってきたのだろうか？

千晴に答えは出せなかった。

恭輔がこの本を入手した経路より、母への想いが胸に溢れだし、頭の中は母のことばかり考えてしまう。

もっと、もっと話をすれば良かった。

もっと、もっと優しくしてあげればよかった。

ちゃんと、

「ごめんなさい」言えば良かった。

何かが胸に詰まったような感覚に陥り千晴は苦しくなった。

その詰まった何かが込み上げ来た瞬間、千晴の頬に一筋の線が出来た。

想い

「千晴！」

恭輔の聲がしたと思つた時には、千晴は後ろから恭輔に引き寄せられ抱きしめられていた。

「・・・恭ちゃん・・・」

本を抱えたまま千晴は体の向きを変えられ恭輔の正面に立つた。涙を見せまいと俯く千晴の額に手を当てて恭輔は千晴の顔を上げる。

「うつ、うつ・・・」

千晴の嗚咽が止まらない。

恭輔は黙つたままで千晴の涙と手元の本に目を向けている。

「泣くなとは言わない。」

恭輔は親指の腹で千晴の涙を拭ってから千晴を抱きしめその背中を優しくさする。

「だけど、もう一人で泣くな。」

「恭ちゃん、いいの？」

涙を堪え千晴は恭輔をしっかりと見つめて言った。

「私、私恭ちゃんのお嫁さんになっても、いいの？」

「昼間言っただろ。」

「だって……全然……全然、お母さんに優しく出来なかつたんだよ。」

必死で涙をせき止めることが出来たのは一瞬で再び千晴の目からはポロポロと涙がこぼれ出した。

恭輔は静かに微笑んで千晴の頭を撫でた。

「おばさんは分かっているから、全部、千晴がどれだけおばさんやおじさんや、藍を、好きだって、ちゃんと知ってたから、だから、もう心配するな。」

「うつうあああん。」

千晴は母を失くした夜と同じように泣き叫んで、恭輔の胸に飛び込んだ。

恭輔は静かに千晴の背を撫で続けた。

泣いて泣いて、少しずつ、落ちきを取り戻して行く千晴。

「恭ちゃん。」

千晴は顔をあげてもう一度恭輔を見た。

涙でうるんだ瞳は熱を持っていたが、千晴の思考が先ほどより落ち着きを取り戻していることが恭輔には知れた。

「好き……小さい頃からずっと。」

「ああ」

「お嫁さんにして」

結婚式もいらぬ。
でも自分が大人になるまでなんて待てない。
なんてわがままな。

それでも

貴方がいいと言ってくれるのなら。

そばにいさせて

恭輔は黙ったまま突然千晴を横抱きに抱えた。

そしてそのままベッドの方へ歩き出した。

ベッドの横にたどり着くと静かに千晴を下した。

千晴は驚いた表情を固まらせたまま恭輔を見つめていた。

「怖いか？」

怖い？ - - - -

恭輔の問いかけを千晴は心の中でもう一度自分自身に問い質す。

怖くはない。

恭輔と一緒になら何も怖がることはない。

千晴はそう確信している。

緊張してなのか喉が震えて声が出せない千晴はだまつたまま柔らかく微笑んで首を左右に振った。

そして恭輔へ向かって両腕を伸ばした。
その腕に捕らわれたように恭輔は千晴に口づけを落とした。

千晴の唇に恭輔のそれが触れたのはほんの一瞬。
突然の出来事に千晴の瞳は開いたままだった。

再び恭輔の顔が千晴の視界に入る。

いつもは感情を顔に表さない恭輔が微笑んでいた。
千晴の胸がきゅんと震えた。

そしてもう一度千晴の視界が暗くなる。

「愛してる。」

心地良いテノールの声が耳に届くと同時に千晴の胸は熱くなった。

想い（後書き）

「16歳最後の日」はこれまでです。

次は千晴12歳編です。

看病（前書き）

千晴 12歳のお話です。

看病

学校へ行く前の鏡に映る自分が大嫌い。

どうして？

どうしてまだランドセルを背負っているの？

せめて、年齢だけでも恭ちゃんに釣り合えば良かったのに……

師走に入ったばかりの日曜日、三浦家は静かだった。

千晴の父誠治の職業は勤務医で勤務先は近所の総合病院だった。

今日は休日の救急外来の担当日のため出勤していた。

母美里は介護ボランティアで老人ホームに出掛けていた。

12歳年上の姉の藍の職業はキャビンアテンダント。

昨日帰ってきて今日は休みだと千晴は聞いていた。

千晴の部屋と藍の部屋は隣り同士、宿題をしている今、隣りの藍の部屋からは物音がしないので、おそらく藍は1階にいるのだろうと千晴は思っていた。

宿題も一区切りし、喉が渴いた千晴は1階へ降りて行った。

藍がいるであろうと思い何気なくリビングを覗いて見たが無人だった。

リビングにあるローテーブルの上には何故だか藍の携帯と財布が置かれていたのを千晴は発見した。

そして今その携帯のディスプレイが電話の着信を告げて煌煌と光っている。

「藍ちゃん。」

千晴が呼んでも返事はない。

既に出掛けてしまって家にはいないようだ。

千晴が再度ディスプレイを凝視すれば着信者の名前が「恭輔」となっていた。

それを確認した千晴は反射的に通話のボタンを押していた。

「恭ちゃん！」

「誰だ？」

酷く掠れた声。

たった一言だったがけだるさがかきりと分かる喋り方、千晴は恭輔が体調が悪いということが分かった。

「千晴だよ。藍ちゃん今いなくて・・・」

「・・・これ藍の番号か？」

「どうしたの？」

「・・・いや・・・風邪引いて熱があるらしくて、かつたるくて・・・家に誰も居ないみたいだから、とりあえずリダイヤルしてみた。」

「ふん。」

つまり恭輔が今現在最後に通話したのは『彼女』ではなくて藍だということらしい。

「・・・ママ達いないの？」

「ああ、玲もいねえ。薬探すのしんどいから誰かに買ってこさせようと思って……」

それで適当にリダイヤルをしたのだと千晴は理解した。

「私、薬買ってきて届けようか？」

「……大丈夫か？」

「うん、藍ちゃんはいないけど、藍ちゃんのお財布があるからそこから借りて行くよ。あっ大丈夫だよ。ちゃんとメモ付けておくから」

千晴が持っている現金で薬代が足りるかどうかわからなかったが、恭輔を安心させてたくて千晴は答えていた。

「勝手口のドア開けておくから、そっから入って来い。あとこっちについたら金は返すからそのことも書いておけ。」

「分かった。」

千晴は通話を切ると出掛ける支度を始めた。

恭輔が言った通り佐伯家のキッチンにあるドアの鍵が開いていた。

「お邪魔しまゝす。」

誰かが帰宅していないかと念のため声をかけるが返事はなかった。恭輔に頼まれた風邪薬以外に、スポーツドリンクと栄養ゼリーとアイスを買って来た千晴はそれらを冷蔵庫と冷凍庫に仕舞った。

風邪薬と飲み水を持って2階にある恭輔の部屋と向かった。

静かにドアノブを回し部屋をのぞくとベッドで寝ている恭輔を確認した。

美里は思うことがあったのか、千晴が生まれてまもなくすると介護ボランティアを始めていた。

極力誠治が休日の日に行っていたが、時折どうしても頼まれた時は幼い千晴を佐伯家に預けて出掛けて行くこともあった。

そのとき千晴が昼寝に借りていたベッドが恭輔のベッドだった。

恭輔の母は千晴のために買った絵本を恭輔の部屋の本棚にしまっていた。

しかし千晴を寝かしつけるために恭輔に読んでもらったの一度だけだった。

「話しに興奮して寝ないから。」

恭輔に本を読んでもらえることが嬉しくて返って寝られなくなってしまうたらしい。

今の千晴は覚えてはいないが、恭輔の部屋はそんな思い出の残った場所だった。

パソコンが置いてある机の隅に水と薬を置いて、ベッドの脇に膝まづいて千晴は恭輔の寝顔に見入っていた。

鼻の頭がツンとして目頭が熱くなった。
いくら自分が好きでも、今の恭輔には『彼女』がいることを千晴は知っている。

今年のバレンタインに恭輔の家にチョコのカップケーキを作って持って行った時に鉢合わせしている。

そしてその『彼女』と先月旅行に行ったことを偶然知ってしまった。

いくら自分が想っても出番がないことを思い知らされるだけで千晴胸は苦しくなり、そのまま恭輔のベッドに額を置いた。

一瞬ベッドが小さく揺れたが恭輔が起きる気配はなかった。

もし恭輔が起きてしまったら気まずいような気がした千晴はベッドの足もと側に顔を向けそのままじっとしていた。

このまま時が止まってしまえばいいような気持にもなるが、それでは恭輔がずっと寝たままになってしまおうと思うと早く良くなって欲しいと思いついた。

「千晴？」

掛け布団がずれる音と同時に掠れた声で自分が呼ばれて、千晴はハッとしました。

「恭ちゃん、お薬買ってきたよ。飲む？それとも何か食べる？あの飲むゼリーとかアイスとかは買って来たんだ。」

頭を軽く掻きむしりながら上半身を起してきた恭輔に千晴は声をかけた。

「ゼリー」

「冷蔵庫に入れてきたからすぐに取って来る。」

千晴は駆け足で1階の台所へ行つた。

部屋に戻れば、恭輔は相当辛いらしくそのままの状態で待っていたようだった。

「はい」とゼリーのキャップを開けて恭輔に手渡す。

恭輔は無言のまま受け取りゼリーを飲んでいく。

冷蔵庫で冷やされたゼリーが恭輔の喉に心地良く通って行けばいいと千晴は思いながら恭輔を見ていた。

「金……」

一心地着いたのか恭輔が声をかけてきた。

「あつ今じゃなくていいよ。ちゃんと藍ちゃんには言っておくから。」

「床に転がってる黒い鞆に財布が入ってるから出して。」

「分かった。」

ゼリーを両手に持ち俯いた恭輔を見れば、変な気遣いをするよりも恭輔の指示に従って置いた方がいいと千晴は思い恭輔のビジネスバッグを開けた。

恭輔のビジネスバッグを開けて千晴は戸惑った。

バッグも黒なら中も黒、入っている財布らしきもと手帖らしきもの

も素材は違ってはいるものの全て黒だった。

これってどうなんだろう？

探しにくくないのかな？

そう思いながら財布を取り出すと財布と手帖の間にあったらしき写真が1枚見えた。

視界にちらりと入っただけだったが恭輔とその彼女が映っていた。恭輔が私服のように見えたので旅行に行った時に撮ったものだった。思った。

「はい恭ちゃんお財布。」

写真を見た事には気がついていないように、でもいつもより強張った笑顔で千晴は恭輔に財布を渡した。

恭輔の方は体調が悪いこともあって千晴の表情が視界には入っていても、いつものように察することが出来なかった。

「藍んところからいくら持ちました。」

「1万。それしか入ってなかったんだよね。」

「1万渡すから釣も寄せ。」

「分かった。」

千晴は自分の鞆から余ったお金とレシートの入った封筒を出していると恭輔の携帯がなった。

「もしもし。」

誰だろうと千晴は恭輔の声に耳を傾けた。

「まだいる。けど今金渡して帰すわ。・・・ああ・・・ちよつと待て。千晴。」

「はい。」

どつやら電話の主は藍らしく、電話を変わるように言われたようだ。千晴は恭輔から携帯を受け取った。

「藍ちゃん、お金、持ちだしてごめんなさい。」

「いいのよ。利息は恭輔に請求するから、恭輔寝たら帰っておいで。」

「うん、分かった。」

通話を切り携帯を恭輔に返した。

「薬と水取って。」

「はい。」

ゼリーを食べただけで薬を飲んでもいいのかと疑問に思ったが、薬の力でぐっすり寝られて少しでも熱の辛さが解消されることの方を千晴は願った。

恭輔が薬を飲んだ後の空のコップを千晴が受け取ると恭輔は財布から1万円札を出した。

千晴はコップをテーブルに置いて封筒と1万円札と交換に恭輔に渡した。

藍のお金だからとすぐに鞆にしまつと封筒の中身を確認していたらしく恭輔が声をかけてきた。

「ゼリーとかなんとか買って来たって言ってたけどそのレシートは？」

「それは千晴からのお見舞いだよ」

「小学生が生意気だな。これも鞆に入れておいて」

声が掠れて辛そうだがいつもの恭輔とのやり取りが出来て千晴は少しだけ安心した。

それから頼まれた通り財布と封筒を受け取り恭輔の鞆に戻す。

写真が曲がらないように気をつけながら入れようとしたら写真がさつきよりもきちんと思えることができてしまった。

紅葉をバツクに恭輔の腕に『彼女』の腕が絡んでいる。

胸に何か鋭いものが突き刺さったような衝撃を受け一瞬にして泣きだしてしまいそうになった。

涙を堪えてじっとしている。

一度息をのんで涙がなんとか止まっていることを確認してから振り向くと恭輔は眠ってしまった。

その寝息はとても静かで千晴の荒れ狂う心の中とは全く違っていた。千晴の頬の堪えていた涙がこぼれた。

「千晴ちゃん次音楽教室だよ。」

「えっ？ごめん奈央ちゃん。聞いてなかった。」

「次移動教室で音楽室だからさあ。千晴ちゃん、なんか顔色悪いよ。」

前の席に座る奈央が千晴の顔を覗き込んで見ている。

「そっかな。」

恭輔の看病もどきのことをしてから4日が過ぎた。

恭輔が今体調が戻っているのかどうかは聞いていない。

藍に言えば直接メールか電話をしてくれるだろうし、そもそも学校の帰りに佐伯家に寄れば恭輔の母か恭輔の弟の玲にでも尋ねればいいことなのだ。

でもその行動が起こせなかった。

もし恭輔の部屋に上がってあの写真がどこかに飾られているかもしれないと思うと佐伯家自体を訪問することが出来ないのだ。

「ん〜。最近息が苦しくて。なんか苦しいの我慢していると話しが聞けてないんだよね。」

「え〜っ。授業中とか大丈夫なの？先生とかに言った方が良くない？それより千晴ちゃんのお父さんお医者さんなんだからお父さんに診てもらった方が・・・」

音楽室へ行くための教科書やリコーダーの入った手提げを持ち、千晴の心配をしてあれやこれやと提案しながら歩く奈央を隣りに見ながら千晴は弱弱しく微笑んでいた。

しかし千晴の視界から奈央の姿が段々と遠のいていく。

何だか隣りに並んでいるはずの奈央ちゃんが良く見えないなあ。

あっ、また苦しくなってきた。

音楽室4階だから息切れちゃうのかなあ・・・

「・・・千晴ちゃんっ！！！」

奈央ちゃんの声も遠いなあ・・・

千晴の意識が真っ白になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9593n/>

BLUE in blue

2011年10月3日00時09分発行